242
843
1

文化五年辰九月写之

朝鮮人来聘之節
於御城御饗應七五三御膳部諸家
古實御尋ニ付差上古法之義書写

大村[illegible]

一引渡しといふハいかなる故ぞ又め角吹ならしといふハ
いかなりの思ぞや

昔引渡しといふハ菜に物をすしく喰ふこれを肴
といふなり天地は此からにまりし時人知て生じ
たる宮なり今日も世説義を式更りと引渡
すと云義なり説の意味くはしくよしなし
一くるふ述かきし出陳よハ肴組といふ引と
云事と婚ふなり播要五段布五枚ならし
なりめ角とハ耳角とかく小角といふもの
是のなきなり吹ならしとハめ角乃梓のいら

さるものなり

一 七五三と申ハ何故名つけしや　この食ニ喰料なりすしへく三ツの道を用申ニハ何ゆへなるや日月あの月とあるしハ常の七五三とかはれり

昔七五三とハ天神地神人皇三代まて之表たるや（み流を秘傳）此指ニ向ふ人嫁之ハ格別容易ニ向ひかさし　七五三ハ天ニ信るへしこれを称ろふ　畑西ニ六星（秘傳）を降臨なさしめて採なり　切と云字を帰ニ菓立跪ハ山海を盛てゝ集まつえさしといへとも　民俗号称よさうしく

武家ニ外し　あるひハ清よかしく万事の始といとなす　王の市ニ出て利するものとよろこひ之仕業をなさすのこゝろにして全国の産物ハいふまてもなしされハ百姓乃よろこひと天下の歓心として衣あつまり集て盛ゐこたへ三礼公の祝義なしきや　通ハ白石式論ニ三使ね伴ニ　御三家の公達ハ揚よりといへとも　此料理のゆゑよしもしさるかれ之天ニ借するを天ニかゝりて向ふ人ハ三位上なくてハ向ひかたし　さる人修士の人称しニなるけハとてをそく来りて信義を通す

ち意を快ありて往昔をいやしと世すたま
くの今に往古の風をおこなふハ先王の
法にありすや もし御武威にをかれて
そむくつさるといへとも早晩つりぬれを乞
御發の意を焉き人やハ彼土にも文治の
意を起すものあらんに已と己のこゝし
人と人とをするハ人所なき業に比せる二ハ
天地父たるものゝめたる氣運をうけて産
すなわち物を集めて天地に報借するなりハ
當の冬に（天武の御宇にありしすなる日本紀）及御座物ハ（御鏡 御刀 御雛 御猫）
こま國ニより公儀に納すまつるハと

禁裡に進献す又
神廟に（御米 御菓子 御箭 御礼）献備す献備に啓らハ
あまりほこれるなり今なく餐する所の
佳猶も我國の嗣国を彼土より慶賀す
是則天の時と浮地の利と得ゝく遠く来て
和をなりきら和をむすひて御三家の
公達をも汁洋とある國土の和と昇し名産
と感ゝく高畢とほせす利をたのしみて
慶意をうけたる今人のおすそさる古例なり
川渡しとこふも和に此意を川渡と不感し
四文の掟をおさえへの掟といふ業ハ必高雪也

葬事古実とされハ其盛をなすしきり
倹約ハらし世の人の孝心ゐのあなり
又宗家の記録ニハ先年男女の損なし家盛の
ことして倹約なき故損ニ営中ニ行厨ニ持来て
倹約故ニ其家の願ニよりて追食すこの比なり
金銀濃わを戒むす

一 総川といふハいかなることのなや
昔総川といふハ鯖（ミイラ）といふ奥なり総子をと
すかし厚ニ九万川といふ也弁云ふと総
の足なるをよすかへ言使ニして云なり東
海の四方川西海の総川なり

一 亀井またハ亀足といふありいかん
昔者ハ亀足といふ所ニ足跡ありそれよりか
かまほとなり蛇ありそのなりせしんなり
と云殺なり亀乃せん度を表しけるなり
杉形も其のしなくれて也しある事

一 福田といふハいかにして書や
昔福田といふの八千鶴千鋼ホを濁黄
しくし縫かとかし織となす千盛子なし
ろき中人形をことのきく盛なり

一 二ノ樋よ猿の多利といふ物のありいかなることのよや

答 足とハ禽肉の上部をすしと云今
世俗ニ鱧の上品なるとすしといふも誤をあり
ハうとくなりしといふ誠なり事物紀原を考
小うふ花鰹と云も是を犯ろニ深て鰹
あり

一 三條家元御池之の節の汁ハ鯉の骨切
し是ハ大鵠とあり盛つけるともあるや
答 節ふとり是会のとり盛わるあるらの
郷と豊ふ鯉ニ雞猪肉株ふ食なり彼ら
の人常ニ雞猪を食ふゆへ無穀なりしと心得り
之人の道の嗜味ふらしてしやされハさゝ目
さしみとも鯉の子付を身へなをとほしの名
とも用ひるなり

一 さゝ目のさし味よらんすとハいかん
答 燕窩唐物也鮮魚濤消云按此物近来
中華商船持来倭俗呼恵比須為蔬屬
僧食之又曰燕造作海濱之石頭物也可食
燕窩見泉南雑志及閩書具説詳也

一 南蠻煮手ニあいろといふ是いかなるものそや
答 小鳥乃部鶉や

一 折三合といふいかなるもののそや

昔折と八本式二天合さり十二合迄あり其の
数と盛ときハ一盛一天合なり羊の数と
盛ときハ角を折として座の柱とし又
羊合宛盛となりこの折し角を折のうこ
高世の宣以ねとふすのし折とうきねうら
そのおり本式折ハ六角三ツ鉄輪足縁
盛板すらし云むね葉山吹てうせんつし太
亀足蝶甲立事盛六角切遠足く廻し
甲立なり

羊合 さんひ焼香毛（かしと葉）紅葉 蝶甲立六角三ツ鉄輪足く（引廻甲立事盛六角）

羊合 小板ニ海浜ニ（金浪色足く外り立結）

一 二ツ星三ツ星の紋といふハいかなる故ぞや

昔二ツ星の紋ハ金吾中納言ニ三ツ星の紋ハ
毛利家ニ盛大三方又ハすゑ盛ニこの意ニ居
なり唐きハ盛ハ者福同ニて盛のりうみ
ハまゐえ盛りのうち金浪浪金の之結ニ
清おのくかさりりうくあり七星の紋とハす
承の秘事さ盛くありてつふさきニ迷かし
そしめふ云天ニ信するまこの祝義ことも
なくすミて只今ハ星の降臨なしうるとこ

表したるも嗜えの祝儀人の饗應も飲食
小豆てるハなしされ無て指話の人最初ハ
流よりこの星の物よ至りてさまさまの意味
秘傳あしとハいへとも此道ニかきらすさまさま人ニ
益なき事と今あしきりいえるもにおし
只据よ向ふ人ハ忠義なりされハ此流定
かりて人とさしめて生しハきさめなり
森羅万象後よ生してこの人育ニなとつ
うしもらしこれ飲食の為なさすや人和
五常といふハ飲食ありて後の義なり要
よ縁無星と呼ふ飲食ハ為の人と星と云ふ
とも

此道の大義神代上古ゟ遺風なるも補よ也とる
（も三度ニあり）

一 土器ニ五寸三寸ゟ名付いかなる故ぞや
答 土器ハ神代よりあるや大巳貴命（ヲホナムチノ）の時
茅渟（チヌノ）縣ニ大陶祇（ヲホスヱツミ）と云神あり古事記よ
みえたり茅渟ノ縣ハ今和泉國ニ属す家の
書ニハ日本土器の初ハ人皇の初神武天皇
道後を征伐し給ふ時熊野山ニ而天の平瓮
を作り給ふ其後高世乃土器賀陽親王
の作らせ給ふと云り三寸五寸と云ハさら花

文談なり

右之書出ハ将軍の名なれハかたく辞しける
といへとも安井氏のせちに望せられけれ
需に應しこゝにつけ侍るのミ　塵放佐信拙記
才浅ふハ筆もくしけれハ恥しきものなり